

居場所づくりは実社会と 異世代間のつながりを生む

自己発見・自己表現 社会つながりへの意志

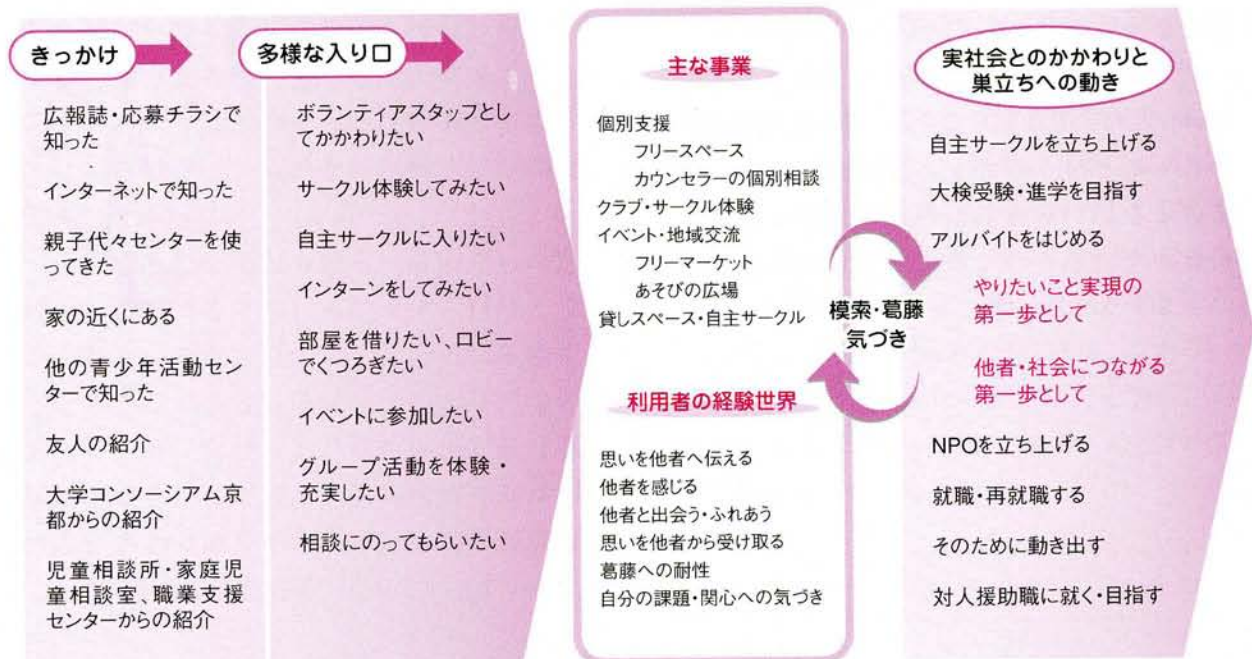
このプロセスには小さな自己発見の積み重ねと、自己表現への意志、かかわりへの意志の萌芽と成熟が見える。また「自分とは似ていても違う存在」として他者がいてこそ、自分の思いの気づきをもたらしてくれる。最初のきっかけはスタッフとの肯定的で共感的なかかわりであっても、次第に自律的・自発的に他の参加者とのかかわりあいへと向かい、その範囲は広がったり、そのまま次の新しい場を見つけて巣立って行ったりする。このようなプロセスを整理したものを図表1に示してある。

ここにはセンターへ来る若者たちの多様な動機と、センター事業を通じての他者と

のかかわりのプロセス、その後の実社会へのつながりと巣立ちの在り様が示されている。なかでも図表の右端の「巣立ちへの動き」に注目したとき、居場所づくりが実社会へのつながりと広がりをもたらす仕掛けとして機能していることがわかる。これは前節の事例からも見えてきたことではあるが、他にも全国的に取り組まはじめている「地域子ども教室」は、地域の人々と学校が連携しあうチャンスとなっている。そのなかで、世田谷区立桜小学校でおこなわれている「さくらっ子体験教室」*3では、地元世田谷区内の大学や地域と連携を取り、「理科実験教室」や「日本の文化教室」「ものづくり教室」などを展開している。

*3：さくらっ子体験教室
世田谷区子ども教室推進実行委員会
世田谷区教育委員会事務局地域・学校連携課
Tel. 03-5432-2723

図表1 南青少年活動センターの青少年利用者の動き



理科実験教室では大学から講師を呼んで、電池づくりや光の性質、DNAの話や実験などをおこなっている。そのサポートスタッフとして、大学院生や留学生が手伝いながら子どもたちとかかわっている。子どもたちは地域の大人や学生ボランティアスタッフのお兄さんお姉さんに出会いながら、学校内外でのコミュニティーで育っていく。

このスタッフの一人は、桜小学校の卒業生のお母さんでもあり、地域から学校支援をおこなっているNPOの代表でもある。

話を伺うと、「子どもと大人、子ども同士、大人同士のかかわりがつくられていくことに喜びを感じる。子どもたちに声をかけたり、かかわったりすることが楽しい」という返事が返ってきた。また「とくに親子のかかわり、子どもたちのかかわりの場を拾い上げたい」といい、「子どものことで地域の方たちが集まるときは、やさしい顔をして集まる」とつけくわえた。

子ども・若者・大人のかかわりの円環から地域社会を創生する

ここでは居場所づくりをきっかけとして、地域の人々のつながりが生まれ、また子どもたちも多様な大人やお兄さんお姉さんと出会い、学校も地域に開かれていく動きが見えてくる。それは地域のつながりが希薄化していると指摘されるなか、子ども若者にとっても、学校と自宅の通学路としての地域から、居場所としての地域へ意識転換し、

実社会のなかでの自分の存在を実感していく可能性を感じさせる。

町田市子どもセンターばあんもまた、子ども委員会を中核とし、小中高校生のつながりにくわえ、20代から50代までのスタッフによる分厚いサポートがある。そこには子ども・若者の「やりたいこと」を最大限尊重し、徹底して寄り添い、実現していくスタッフのかかわりがある。

子ども・若者の参画を地で行きながら、世代間のライフサイクル創生の視点が自覚的に入り込んでいる。世代のつながりと支えあい、互いの顔の見える肯定的な感情に支えられた関係づくり。このことが「まち」への愛着を生んでおり、若者たち子どもたちに、他者からの視線を意識した自立的な生き方を自覚させている。

1年前にセンターを巣立ち、それまで子ども委員会を引っ張ってきたある若者は、「僕にとってここは自分たちの場所だし、自分たちでつくった場所」「ここでの活動を通して、地域の多くの人と出会ってきた。将来、この町田から出ることはない。こんないい街はない」ときっぱり答えている。そこには、いかに自分たちが大切にされてきたか、自分たちの意思が尊重され、承認されてきたかを充分感じさせる力強さがある。